

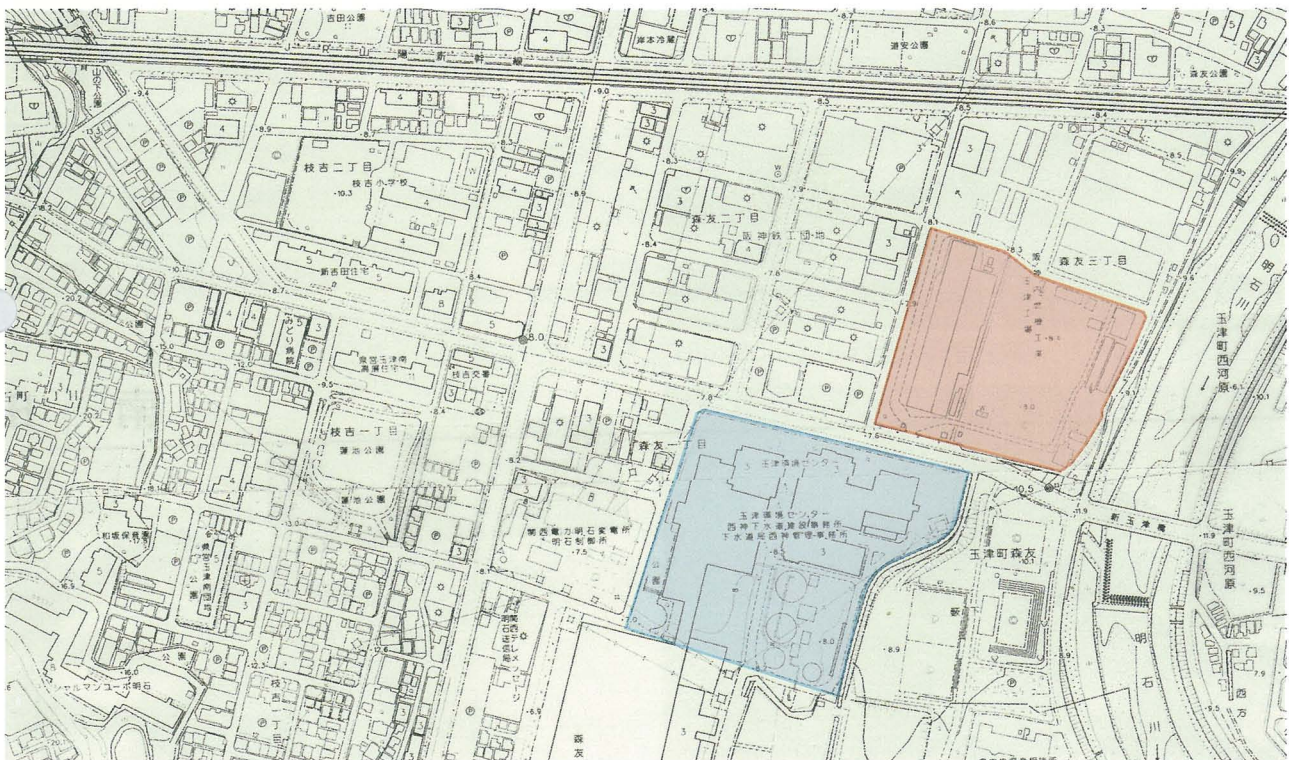
吉田南遺跡の発掘調査

吉田南遺跡は、玉津環境センター（現水環境センター）建設に伴い、1976年から始まった発掘調査によって発見された遺跡です。数年に及ぶ調査の結果、弥生時代後期～鎌倉時代にかけての人々が生活していた集落であることがわかりました。

特に、奈良時代には多くの掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）が整然と立ち並び、瓦・木簡（もっかん）・墨書（ぼくしょ）土器などが出土しました。それらのことから、明石郡衙（あかしぐんが、役所のこと）がこの場所にあったと考えられています。川からは木製の橋脚（きょうきゃく）が発掘され、当時の土木技術をかいま見ることができました。

その後も数次にわたり調査が行われ、古墳時代の集落と水田のある場所もわかってきました。また、奈良時代の役所は水環境センターの南にも西にも広がっていないことがわかり、およその規模がわかりました。

今回の調査は、この吉田南遺跡の第16回目の調査です。調査の結果、地表面から深いところに住居跡などの遺構が存在していたため、非常に残りのよい弥生時代後期～古墳時代後期の住居跡がたくさん見つかりました。



今回の調査地（第16次）



第1～4次調査

今回の調査では、円形や正方形・長方形に地面を掘りくぼめて作った竪穴住居(たてあなじゅうきょ)や、掘立柱建物(ほったてばしらたてもの)など住居跡が10軒以上出てきました。住居は当時の地表面でやや高くなった場所に、密集して作られていることがわかりました。

この竪穴住居の中には、当時の人々が使っていた土器などが、たくさん残されていました。この残されていた土器などを手がかりにして、昔の人々がどのように暮らしていたかを、私たちは知ることができます。

弥生時代の住居には、中央に炉(ろ)が作られ、そこには炭や灰がつまっていました。そして、住居内側の周囲には、床を一段高くした部分(ベット状遺構)を作っている場合が多く見られます。

古墳時代になると、煮炊き(にたき)用のカマド(おくどさん・へっついさん)が、主に住居の北側に作られています。

竪穴住居は、その面積に応じて、2本や4本の柱を住居の中に建てて、屋根を支えています。住居は何度か建て替えが行われたようで、古いものを壊して新しい住居を建てたり、改築して広げているものもありました。

また、溝の中には当時の人々が使っていた土器が、たくさん残されていました。上下が逆さまになっていたり、きちんと並んでいないものが多いことから、ゴミ捨て場のような場所だったと考えられます。



弥生時代の溝 (SD209)



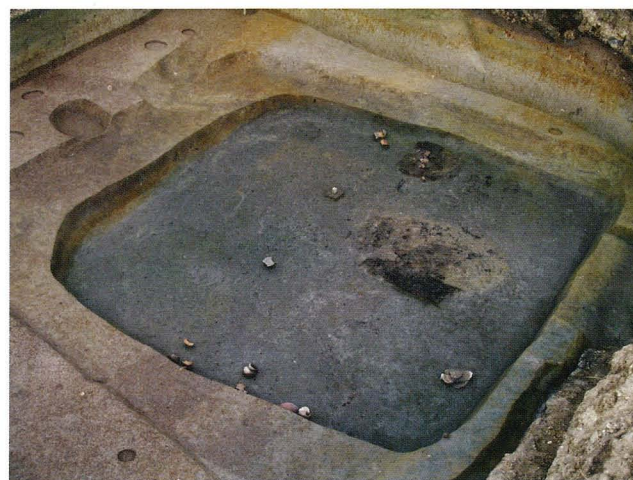
古墳時代の竪穴住居 (SB203)



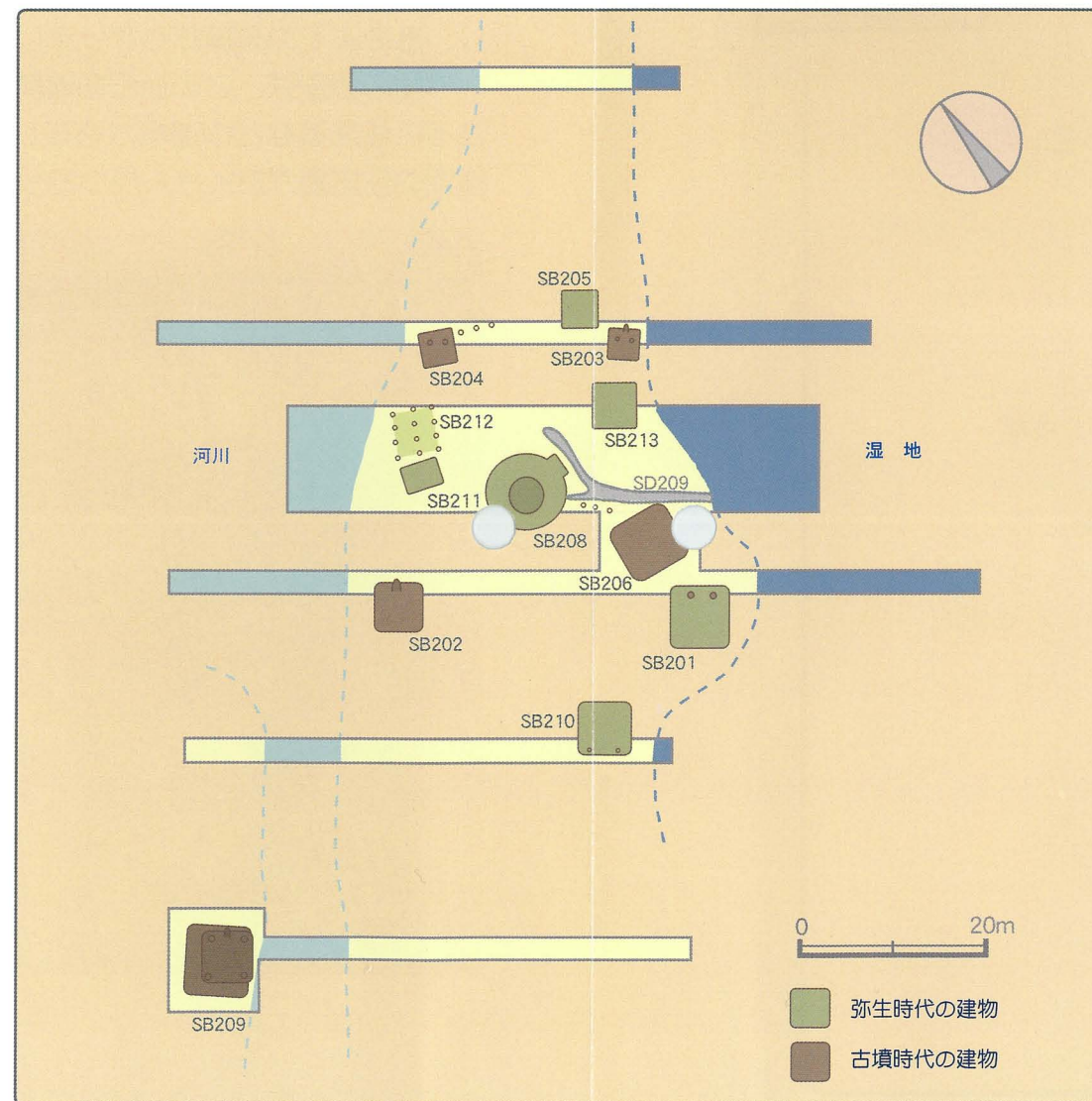
古墳時代の竪穴住居 (SB203のカマド)



弥生時代の竪穴住居 (SB208)



古墳時代の竪穴住居 (SB209下層)



掘立柱建物 (SB212)

以上のように、今回の発掘調査ではこの地域に暮らした、弥生時代後期～古墳時代後期の人々の暮らしが見えてきました。この時期の住居が河川に近いところに密集して作られているということがわかりました。

また、明石川の対岸には新方遺跡(しんぼういせき)があり、この時期の住居跡が見つかっていないことから、引越しをしてきたのかもしれない。

この場所では、これより後の時期は耕作地として利用されていて、集落のあった様子はほとんど見つかりませんでした。



埋蔵文化財センター

神戸市内の遺跡から出てきた土器や石器は、西区の西神ニュータウンにある埋蔵文化財センターに運ばれます。泥や砂を洗い落とし、割れている破片をつなぎ合わせ、元の形にします。この吉田南遺跡(水環境センター)から出てきた土器もたくさん展示しています。また、市内各地から出てきた土器や石器、そして木や金属で作られた道具・装飾品などがたくさん、しかもわかりやすく展示してあります。ぜひとも見学してください。

入館は無料です！

神戸市西区糞台六丁目 西神中央公園内
TEL 078-992-0656・7 Fax 078-992-5201
地下鉄西神・山手線 西神中央駅下車
南へ徒歩5分